

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	胃散を飲む男 : 小説
Author(s)	花田, 徹太郎
Citation	龍南, 176 : 364 - 383
Issue date	1921-02-11
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7756
Right	

胃散をのむ男

花田 徹 太郎

Sは私があの素人下宿で始めて知つた男だつた。ずんぐりとした小男ではあつたが、何となく氣むづかしいところがあつて、永いこと親しめなかつた。それで二人とも同じ學校に通つてゐ乍ら、勿論こちらが二年も級下ではあつたが、馴々しく挨拶を取り交すことなどはなかつた。まして打ちとけて教師の悪口を云つて興がつたり、選手の遠征の噂をしたりなどすることはまるでなかつた。

それどころではなかつた。私のところへ友人でも來て、晴れやかな雑談に耽つてゐる宵など縁側の廊下を踏み鳴らして來て障子の外からいきなり、「喧しいから靜かにしてもらひたい」と怒鳴ることが屢々あつた。ある時など中學生のM——Mは私達の後からこゝに移つて來た。この時三人がこゝへ下宿してゐるすべてであつた。——このMが私の部屋に來て生れつきの痾高い聲で英語の質疑をしてゐるときであつた。

Sの部屋にあたつて本を投げ出したり、紙を破いたりするらしい氣配が暫く續いてゐた。私は可成り氣にしながらも、年若いMの崇高な感興を殺ぐことも氣の毒に思つて、敢て注意することが出来なかつた。するとSのどこの障子が慌しくあかる音がしたかと思ふと、廊下を芝居の五郎が踏む様な足音がして、すぐ私の部屋の外にとまつた。

「靜かにして呉れたまへ、眠ることも出來はしない」

Mははつと思つて龜の様に首を縮めた。そして私の眼を見た。彼の神經質な顔には恐怖を誤魔化さうとするための様に微笑が浮んではゐたが、かうした咄嗟には馴れてゐないと見えてその微笑からしてひどくうろたへてゐる様に思へた。

「ごめんください。ついうっかりしてゐたので」

私はかうした辯解がするすると口に出て來た。それほどSの抗議には馴れてゐたのである。この事があつてからMはひどくSを憚り出したのであつた。

「Sさんはおそろしい人です。何ほ何でもあんなに怒らなくてもわかるのに。」
憚うMの云ふのを私は度々聞かされた。

「いや、人がいゝからですよ。あてつけがましい振舞をされるよりは、いくら氣持がいゝか知れない」

私はまた實際かう思つてゐたし、Mにもかう云つて宥めるのが常であつた。

私はSのかうしたあからさまな振舞を全く彼の特徵として享けられないのではをれないのであつた。しかしこの特徴も別に私を彼に親しませる何等の動機をもなさなかつた。二ヶ月近くも無愛相に馴れて來たこの間柄を今更こちらから折れてゆくのは、何となくばつの悪いものであつた。で私は一方ちよつと淋しい氣がし乍らも、尙この無愛相な間柄を、どちらかど云へば寛いだ心でまた一月ばかりもつゝけた。

こゝらで………二人の間柄を破壊するある事件が勃發した。而もそれはほんのちよつとした事件で、これで今迄の間柄が壊れたといふのは、實は今や二人にとつてそんな風な關係がいゝ加減苦しくなつてゐたせいでも知れなかつた。

「T君、もしか君は僕の片方の靴を知りませんか」

と云つて彼が鋭い眼で私を見たのは、確か十一月頃のある晴れた朝であつた。

「今日は体操があるといふのに、どうなつたんだらう。」

そこで私も古風な、向側まで見透せる様な、そして白い埃の臭ひのするところの高い床の下を覗き込んだり、り、い、て、ふの庭木の下を探したりしたが、それらしいものは見當らなかつた。「犬ころが銜へて行つたのかも知れませんか」私は恰度その朝起きたときも、頭を地にくつ着けて轉る様にしたり、い、て、ふの下をぬけて板壁の破れた所からあはて、逃げてゆく小狗の姿を見たことを思ひ出して

「まるまるした黒い奴がよく来るではありませんか」

と附け加へた。

しかしその日の体操は私の靴でうまく間に合はせることが出来たのであつたが、その日の午後私が友達のところから歸つて来る途中、下宿の近くのある家の赤い格子に次の様な張り紙を見出した。

——片方の靴のなくなつた方はこの家へ——もどから私はその家に犬が一匹ゐることを知つてゐたので、その犬がSの靴を銜へて歸つたのに違ひないと、その場で極めて了つた。そこで餘程這入つて見やうかとは思ひ乍ら、どうしても本人がゆくのが順當な氣がしたので、彼が外出から歸るのを待つて告げた。Sはでは明日行つて見やうと云つたが、私達は矢張りそれに極つてゐるなどと話し合つた。Sの靴は彼が小男であるだけ小形な可愛ゆらしい編み上げであつたが、皮は白けてゐる上にところどころ鞆もあるし、紐などは千切れて見る影もなかつた。私はこの虚げられ通した二個の靴が縁の下に轉つてゐるのを一種の憐憫をもつて見

やつた事があつた。せめて一度位、彼が墨でも塗つてゐるところを見たら私はこの二個の虐げられたるものためにどんなに祝福しただらう。私は朝彼が無造作に靴を足に突掛けるころと、學校から歸つて来たとか、縁側に腰掛けるなりほいと放り出すところとより以外に、彼と靴との交渉を見た事はなかつたのであるから次の日の午後ふと思ひ出して彼に聞くと、

「靴ですか。行つて見ると違つてゐましたよ。でかい赤靴でした。」

と云つて眉を寄せたが、頬の肉を盛りあげて微笑した。

「さうでしたか。でも黙つて貰つておいでればいゝのに。」

「ところがあちらも右足でした。右足二つでは一寸仕様もありませんね」

やがて幾日かすると彼は赤靴の右手を買つて來たので靴の一件はこれで一段落をつげた。勿論ある時私は何かの機會に残りの片靴のことを思ひ出して屑屋に拂つたらなど云ひ出したことはあるが、眞面目な問題にはならなかつた。

とにかく私達はこんな風にしてたうどう思ひ切つて接近したのである。それからと云ふもの、彼はよく私の部屋をのぞいたり、話しませんかなど云つて誘つた。

「では暫くお邪魔しましょうか」

ほんの一寸の間と思つて彼の部屋へ這入つた時でも、午後ならば夕食になるまで、夜ならば十一時迄も二時までも話し込むことなど珍らしくはなかつた。

彼の部屋は八畳で正式の床の間まで附いてゐるので一人では勿體ないほどの廣さがあつた。持ちものとし

ては緑色の机掛をかけた大きな机が一脚と竹細工の本立が一個と教科書と色んな薬品の瓶が數十個と、見廻したところこれ位のものに過ぎなかつた。中でもこれら數十個の薬瓶は陰鬱な部屋内の空氣としつくりと合つて、この醫科の一學究Sを色どるには充分であつた。

も一つ、始めてこの部屋を覗いたものでも、ノートだとか紙屑だとか雑誌だとか教科書だとか新聞だとか巻煙草の吸殻、さてはインキ壺だとか、色んなものがごちやになつた机の上に、すぐ見出すに違ひないものがあつた。それは赤い星印のついた小さな黒く光る罐であつた。むろん或時はそれが黄い厚紙製のものであつたり、ある時はまた安つばいブリキのまゝのものに變つてゐたりすることはあつたが、とにかくそうしたものが一個、時には二個、置いてないことはなかつた。これがすべて胃散の類であるといふことは私にもすぐ分つた。私は彼の部屋に入るとき、これら胃散の罐が不秩序な彼の周圍に如何に濕ひを持たせ、また如何によく彼の生活を表徴してゐるかを思つたものである。

此のころ私達は雑誌の創作や、女のことや、教師の評判や、友人間の出來事や、などについてごん底まで掘りかへす様な話し方をした。けれ共大抵の場合私の方が聞き手であつた。ある時彼は彼の郷人で亞米利加の大學にゐるとき發狂して歸つて來た男のことを話した。その男といふのは日本の憲法は不完全だから改正すべきだと云つて、現にその草稿を作るに忙しいと云ふのであつた。

「面白い男ですよ。どうです一つ小説に作つては、」などと云つた。

ある時は、ある休學した男からの二間もあるほどの手紙を讀んで聞かせた。それはS達によつて達磨と呼ばれてゐるといふその男のプラトニツクな戀の通俗小説的告白であつた。Sはこれを讀むのはこれで三度目

であると云つて火に焼く積りだと云つたが、あまり面白く達者に書いてあるから私が自分で読んで見たいと云ふと、一切内證にして置くといふ約束でその手紙を私に呉れた。

次の晩だつたかと思ふ。例のMが私の部屋に來たから少しばかりと思つて、むろん極く小さな聲で彼に読んで聞かせてゐると、Sが眼をむいて闖入して來た。

「折角ですがその手紙は僕にかへして下さい。」

その眼はこちらの不信を詰る様にとつと見つめてゐるのであつた。

「どうぞごめんなさい。ではこれをお返へします。」

「悪く取られては困りますよ。」

彼はかう云ひ乍ら袂からマツチを出して火をその手紙に移した。火鉢の中で毒々しい焰が靜かに白い紙をなめてゆくところをお互に無言のまゝ見詰めてゐた。たゞSだけはときどき火箸で燃をよくすることを心懸けた。

こんなことがあつてもSも私も決していつまでもまづい思ひをしないほどに二人は近づいてゐたのであつた。そしてその後私には彼の部屋を訪れてしんみりとした會話をとり交すのであつた。

ある時はいつか話は彼自身の人生觀に這入つてゐることがあつた。私はたゞ「さうですね」といふ簡単な言葉で答ふる外相手になり様はなかつた。そして聞いてゐるうちにいつか彼の無妻主義が持ち出されるのが常であつた。

「とにかく僕は自分が生れたといふことを呪ふてゐますよ。だからせめて生みたくはありませんね。」

彼が煙草の煙を唇から鼻から眉に引つかけながら苦り切つた顔で語るのを見ると、一種の座興だなどと思ふ譯にはゆかなかつた。少くとも、女は嫌ひだとか、女はうるさいとか云ふ様な薄弱な根據に立つ推論と同じ様に見える譯にはゆかぬ氣がした。そしてこれならほんとにやり通すのかも知れないと云ふ様な直感がすぐ私に來るのだつた。

しかし何故彼が自分の生れたといふことを呪ふ氣になつたか、彼の生活をあまり深くは知らない私にも、もちろん理解の出來る筈はなかつた。けれど生理的根底を持つ厭世觀であると考へられぬでもなかつた。何故なら、彼は輕くない神經衰弱に罹つてゐたらしかつたからである。彼は實際藥でも焼けた様な蒼黒い顔色をしてゐた。心持くぼんだ眼玉はとき／＼糸の様な血管を見せて、ぐるりとひっくり返へる様に動いた。その上、齒は煙草でうす黒く染つてゐた。

ある遅くまで語り更かした晩であつた。私は彼が勸むるまゝにうつかり四五本のバットをふかして了つたのを氣づいた。自分の部屋に歸つて床についてからも、頭が痺れた様な氣はする。寒氣は催はす。おまけに吐きそうなシヨックが襲ふといふ工合で、私は煙草に中毒した苦しい一夜をうと／＼と明したのであつた。この晩に私はSの部屋にあたつて薄氣味の悪い唸り聲をきいた。まるで感電した工夫が、電線にかゝつたまゝ死ぬまで出すといふ様な長い長い唸りであつた。しかしSが唸されてゐるといふことは分つてゐながら、ともすると自分も何かに襲はれる様な状態で私は身動きすることさへ叶はないほどであつた。

次の朝私はまだふらく／＼するので學校を休んだ。彼が學校から歸つて來た時、そのことを話すと彼は昔からよく襲はれる性だといふことを冒頭にして次の様なことを云つた。

「それがきつと生首ですね。それも可成り過去の時代に属するものですがね、青磁色の月代でもつて、かう髪毛を振り分けてゐるところは、たゞそれ丈でも凄いですよ。そんな奴が歴へつける様な魔力をもつて天井からぶら下るときと來たら、もうとてたまりませんよ。形相ですか、さあ、夢の中では見覺ねのある様なない様な氣がして怖がるのですが、目が覺めると思ひ出せませんね。」

「以前どこかでそんなものを見たことがおあるんじやありませんか。」
私はこの話題にまだ未練があるのでこんな風に促してみた。

「僕も考へたことがあります。さう云へば祖父さんが大の淨瑠璃狂でよく人形芝居の人形などを持込んだといふことですから、その首の記憶が夢の中によみがへるのでは無いかとは思はれますが、しかし何しろその祖父さんといふのも僕が三才の時になくなつたのですからね」

「而しそんなことはありそうですね。僕はよく夜中に目覺めて今の夢は原始時代の生活ではなかつたのだらうかなど考へることがあります。そしてそんな風な考もまんざら馬鹿にもならぬ様な氣がします。こんなことはもう誰か云つたことかも知れませんが、實際夢の研究によつて人間の生活の過程がもつとはつきりと分りそうな氣がします。」

「何れにしても夢の研究は面白いことですね。僕には夢と個性、本能、遺傳、病源といふ様な問題が興味をもつて考へられますね」

私達は尙自分達の見た夢の實例について語り合つた。

この事があつて以來彼は私に煙草を無理強ひすることはなかつた。多分これまでは私を遠慮深い男だと思

つてあんなに勧めたに違ひないのであつた。

「しかし煙草なんか飲みぬに限りますね」

彼はこんなことを云つたことはあつたが、その後も机掛の上に煙草の灰ののつかつてゐないことはなかつた。

試験が近づいたころは火鉢はとても放せないほどこの南國の舊城下も寒いのであつた。Sが益々煙草と親しんだのは云ふ迄もなかつた。

「バット一箱では應へませんね」

といふ彼の総の重ね着には煙草の火で焼いたらしい形跡がいくつも見出されたものである。これは煙草の火ではなかつたが、ある時私は彼の袖に刀の鏢大の焼跡を見出した。

「これですか」彼は例の通り頬の肉をもち上げて微笑み乍ら説明するのだつた。

「これは昨夜焼いたのですよ。科學のノートを寫してゐたが、眠いのでそのまま横になつてゐると、何だか噎せそうで苦しいでせう。眼をさますとこの通りです。火鉢の上に袖をこんな風に打ちかけて寝てゐたのですね」

彼が打ちかへして見せる焼跡と云ふのは羽織を抜いて、袷を抜いて、一枚の袷と襦袢とを狐色に焦してゐるのであつた。

「危なかつたですね」

「何だか腕の、いや身体全体がですね、熱くなつてゆくのが、何とも云へない夢心地でした。」

私はこの言葉が彼の耽溺性をあからさまに表現してゐるのに氣附いたとき、何だか櫛られる様な氣がしたのだつた。

彼はこの著物をそのまま平氣で着て歩いた。そして彼がすんぐりとした躰軀を懷手して運ばせてゐるところを見ると、一寸悲痛と云ひたい氣がした。彼はよく外出する男であつた。ごちらかと云へば私なんかと語る夜よりは外出する夜の方がずっと多くあつた。試験も間近だといふのに彼は夜遅く歸つて來ることも少くはなかつた。

「相かはらずご勉強ですね」

と云つて私の部屋の前を素通りした、これから彼は勉強にかゝるのらしかつた。がまた私を呼ぶ場合も少くはなかつた。

「少し話しませんか」

「お邪魔しましょう、今からご勉強とは偉いですね」

私はよく火鉢の傍になど投げ出された物理のノートを見ながら云ふのである。

「夜が更ければ頭に這入らないのですね。と云つて早く寝れないし、やはり外に出なければならなくなるのです」

こんなことを云ひ乍ら彼は例の罐の中から白い粉を匙に山もり二杯か三杯口に放り込むのであつた。

「洋食屋やそば屋などの前を通ると、こんなにはほしくないときでもつい這入る氣になつて了ふし、さうすると歸つて來ても勉強は出來ぬといふ譯ですね。」

私は彼が勧むるまゝに胃散をのんだことがあつた。溶けてゆく様な薬の刺戟を、唾液でそろ／＼になつた粉薬そのものとともに、口の中で轉がしまはつたほど私にとつてこの胃散はなつかしいものであつた。

「誰にでも利くといふ譯ではありませんよ。僕の様には馴れては駄目です」

といふSにもその馴れて駄目になつた胃散が事實缺けてはならない様に思はれた。

彼はぼつと眼の縁を赤くしてゐることはあつたが、酒はあまり飲める方ではないらしかつた。どちらか云へば食ひ氣で生きてゐる様な男であつた。恐らく何の爲に食ふのか彼自身にも分らなかつたかも知れないこれは日曜日の午後のことであつた。「今日は西洋料理を十三枚平げましたよ」と云ひ乍ら彼は瀉を飲んで胃散をのんでその儘寝たことがあつた。大きな蒲團をどつかりと着て、頭だけちよつびり出して寝るのが彼の癖であつた。そして眠れなくて苦しいときには、ノートだとか小説だとかを頭のところを扉の様に立て、殆んど蒲團の中から覗く様にして讀むのであつたが、この時火鉢のところへゐた私は「ひとりでッすか」と尋ねないでは居れなかつた。

「むろんひとりでッすよ」

「驚きましたね。面白いことでもあつたのでせう」

「何も面白くはありませんでしたね」

私は吊れて運ぶ給仕女を尻目にかけて乍ら眞面目に片つ端から平げてゆくところの彼を想像すると何となく微笑まれた。この男がかう見わても戯謔の一口や二口はさくのだらうか。それともあんなところでも蛙の様にむつちりとして澄してゐるのだらうか——こんな事まで考へられた。

一學期の試験はこんな風にして済んだ。これ迄私達は下宿屋の家庭的な不和や無智な待遇に憤慨して、お互にどこかへ移りたいなど話し合つてゐたが休暇が來たので銘々國へ歸つた。そもそもその下宿屋といふのは五十いくつかになるおばさんがやつてゐるので、家内と云つては外に二十になる息子が一人あるばかりであつた。少くなかつた兄弟達は片つ端から死んで了つて今では長崎で辯護士をしてゐる兄が一人残つてゐるばかりだと、Kと呼ぶ息子は云つた。母と子との間の詳しいいきさつはこゝに書くことは止すが、兎に角あり觸れた親子喧嘩とは餘程違つた種類のものが、日常私達までを巻き添へにして起るのであつた。これが私達が早く何處かへ逃れたいと願つた最も有力な原因であつたのである。

そこで休暇が終つて歸つて來るなり私達は下宿屋を探し廻つた。ある日Sがその友人のあるところが空いてゐるから行きませんかと云ふので早速二人で行つて見ると、成程、高臺に立つてゐる離れの二階のことゝてこの舊城下を一眸のうちに收め、遠い火山の煙さへ見られた。

「學校が少し遠すぎるが」

S自身は學校の近くに見出したいと云つた。

「この部屋はあなたの様な方にはふさはしいと思ひますよ。」

私は云はれる迄もなく氣に入つたので二月になつたら行くことに約束して歸つた。

その晩、私はSの部屋でいつもの長話を始めた。このごろ悪い場所へゆき出したらしいKのことや、休暇で歸つた儘病氣とかで未だに出て來ぬ中學生Mのことや、私の移らうとする下宿の美しい後家さんのことや、こんな風におどなく話題が移つて一寸とぎれたとき、Sは思ひ出した様に煙草の吸殻を灰に埋めた。

「こんなものがあるのですかね」

彼は黒い手首を本立の下に入れて一本の軸をとり出したのであつた。彼は埃を紙片で拭ふてから、ばらばらと解き始めた。

「これが賣れたら今晚のみたいものですな」

彼が立ち上つて、手を高くさし舉げた上に、尙爪立つ様にしてやつとふら下げた軸はと見ると、太鼓の様な反橋に數本の杉と一個の神燈とをあしらつた淡々たる墨繪であつた。私はじつと見詰めてゐるうちに、杉の梢にあたつて黙々と飛んでゐる鳥の一群を見た。びたりと壓へるほどの勿體のある落款を見た。

「これなら賣れるにしまつてゐます。一体誰の作品です」

私には落款がどうしても讀めないのであつた。

「大崖といふのでしょうか。知りませんかね、こんな雅號を」

「さあ、どこかで聞いた様な氣はしますが、一寸思ひ出せませんね。しかしきつと名のある人かも知れませんが。とにかく骨董屋に見せたらどうです」

「じゃ賣り飛ばしますかね。これは國からこつそり持つて來たのですよ。何とかなるだらうと思つて」

彼はその軸を丁寧な布呂敷で巻くのであつた。そして今宵はこれで私の送別會をするといふので下宿の息子の区も誘つた。

寒い夜の裏通りをいくつも私達は通らねばならなかつた。なる丈幾軒も同じ店のあるところが自然値もはづむだらうと思つたからである。

「とにかくいくらかは分らないが、きつと高く買ふにままつてゐますよ」

「この店に這入つて見ましよう。軸がたくさん掛つてゐるから」

Kもこんなことを云つて私達は白髯の老人のゐる古物屋に這入つたのであつた。

「軸を引取つて呉れませんか」

Sは片手を袂の中に入れたまゝ突立つて云つた。

「どれ!」と云つて眼鏡をかけ乍ら老人は恭々しく布呂敷から軸を出して、ぱら〜と少しばかり解いたかと思ふと、

「新物では駄目だあね」

と云つてまた無造作に巻きこんで了つた。

「勅題は社頭の杉か」

彼はこんごはもともと通りに布呂敷に包みもしないで、眼鏡をはづしながら突き返したのである。Sの眼はばつちりと張られた。けれどそれもほんの瞬間で、彼は軸と布呂敷とを受取るや否や無言のまゝ出て行つて了つた。

「分らない爺だ」

私はこんなことを云つたが何が分らないのか自分にも答へることは出来なかつた。

「もう一軒はいりましようよ」

Kは名残惜しそうに云つたが私達は黙つてゐた。Sはいつかその軸を脇差にして歩いてゐるのであつた。

その儘私達は活動寫眞館にはいつた。そして歸りにあるそば屋に上つてビールや酒をのんだ。Sも私も強くはなかつた。Kは自分の強いことを自慢にして獨りで女をからかつてゐた。眠いので横になつてゐると、女のすきを見てKは何處からか蒲團を引き出して來た。私は酸っぱい様な臭ひのするこの重たい蒲團の下でどうどししながら、Sが同じ蒲團から首をつき出して火鉢の中に吐くのを知つた。女達が來て騒いでゐるので目をさまされた。一時になるから歸れといふのであつた。あたりはしんとしてゐて客のゐる氣配はなかつた。一人の小さい女はKがこれも何處からか出して來てかついであるた女物の袴を、黄い電燈の光りに照して、汚いものでもつけてはゐないかと蚤取り眼で調べてゐた——とにかく私達はぶつ／＼不平を鳴らし乍らもたまらぬほど冷い戸外へ追ひ出されぬ譯にはゆかなかつた。そこでKが持つて來た一枚のマントを三人で蒙つて歩いた。

家に歸つたときSは胃散をのんだ。私もKものんだ。そして代る代る冷なきつた湯沸しからじかに喉をうるほしたのだつた。

次の日は例の軸をもつて私の部屋へ這入つて來た。

「實は今財政困難ですから昨夜のは驕つて置いて下さいませんか。」

「むろんその積りでした」

「さうですか、ありがたう。ところで私の記念としてこの軸をとつといて下さい」

「ありがたう。却つてお氣の毒ですね」

かうして數日して私が移轉したときその軸は私の狭い部屋を飾ることになつたのであつた。

前にも云つた通り新しい下宿にはSの友人もゐたので彼は屢々遊びに來た。そして例のたはいもない話をしんみりとして歸つた。

ある時彼は學校の公開演說會に出されるからその演說の下稽古をしたいと云つた。

「おひまならば一つ聞いて下さいませんか」

そこでその晩私達は測候所のある高臺にのぼつた。冷い月の光の中に舊城下は死骸の様になつて横はる頃である。彼は草稿を懐から出して如何にも平調子でその演說といふのを始めた。

「……私はその任にあらざるを知つて再三辭退したに拘はらず、どうしても委員の方がきき入れて下さらない。物理化學共に赤丸をとつて慈悲深い教師を手古摺らせるといふ私に、この白羽の矢が立つたとはまた何といふ皮肉でしょう……」

恰も固唾をのんでゐる全市を前にひかへて語り出した様な彼の態度は悲壯と云つても決して誇張ではなかつた。

かうしたもつとりとした演說が二十分あまりもごんごんと運ばれて來たときに、

「……さて、古代希臘の珍書に……」

と口調を改められた時には一寸私もちぢ／＼としたのであつた。何故ならもういゝ加減に終りに近いと思つてゐたからである。聞いてみるとこれからがいよ／＼本題に這入つたのであつた。彼が——さて古代希臘の珍書に——といふ言葉をもつて入つた本題は大略次の様なものであつた。

古代希臘の珍書に三つの玉の話がある。純白な生命の玉、眞黒な黄泉の玉、眞紅な愛の玉といふこの三つ

の玉が世界中に存するのであるが、之を兼有するものは至つて鮮く、その上各々一万年を周期として粉碎し更に凝固するのである。或時この三玉を抱いた人があつて、美人を探して漂泊したが、ある宮殿の中に之を得た。ところがその結婚の夜偶々周期に當つた三玉は一大響音と共に粉碎して了つたのである。而し此に不思議なのは生死二玉は互に打ち消して愛の玉の力のみは作用して夫婦仲は甚だ睦しく、殊に星の様に散亂した愛の玉の力によつて、その夜楽しい結婚が無數に成立したといふことである——

——さて愛の玉の光波即ち愛波について物理學的考察を下してみるに、暗黒体は所謂生眞面者で、これに投ぐれば愛波は悉く吸収せられる。滑体に愛波を直射すれば所謂鐵砲となりて反り、斜投射すれば反射は第三者に及び、粗体に至つては所謂浮氣者で乱反射をするのである——

——さて生と死と愛の自在境ユートピアは夢であり平和の世は遠いが、一切のものに愛を施さんとする努力は可能であり必要である。吾人刀圭家に於て特に然り、醫は仁術なりといふが、

「云はゞ生死愛を併有する吾人刀圭家は充分愛の職責を盡しユートピア現出の一資となさなければならぬのである」

彼はこゝに至つて如何に現代の刀圭家を痛嘆したか。しかし何よりも私を驚かしたのは、彼の辯と舌とであつた。

「終りに諸君が先づ愛の對象、意中の人を見出されんことを祈つて……」

私は彼にこの演説殊に最後の一句を聞くことを如何に意味深く思つたか知れなかつた。と云ふのは彼自身としては常に無妻主義を高唱してゐたからである。

演説が濟んだとき私は形ばかりの軽い拍手をしたのだつた。がらんとした天空に自分の拍手が如何にも聞
抜けに、臆病に響いてゆくのを感じがしく私は聞いた。Sは時々月光にてらして見てゐたところの原稿を巻き
乍ら言葉を改めて云つた。

「どこかわるいところはありますか」

「わるいところと云つて別に、たゞ冒頭が餘り長すぎはしないでせうか。ユーモアには富んではゐますが」
「僕もさう思ひました。けれどある友人は締めぬがいと云ふのですが」

「わゝさうも思はれますね。また運び方一つでは却つて効を奏するかも知れません。題は何とつけるので
す」

「題ですか。徂徠とつけたいと思ひますが。漱石の徂徠ですね」

「それは面白いですね。しかし仲々巧いんですね」

こんな會話をしながら私達はその高臺の下で分れた。

その後になつて私は彼の演説が聴衆を隨喜させた唯一であつたといふことを新聞紙上で知つた。實は私は
その演説會にゆくことが出来なかつたのである。

Sと私とはそれつきりで會ふ機會が少くなつて行つた。もちろん學校では度々見たが、落ちついて話す時
間は持てなかつた。

その後中學生のMも彼の下宿を出た。

「Sさんは私に先に出よなんか云つて自分はまだゐるのですよ。おばさんとは喧嘩ばかりしてゐる癖に」

とある時Mは私に話した。要するにSは移りたいとあせり乍らその移るといふことを大儀がつてゐるのに違ひなかつた。

七月彼が卒業して、まだ學年試験に忙しい私より一足先にその國へ去るとき停車場に送つた迄に、私は彼から次の様な話を聞いたのを覚えてゐる。たしか彼が自分達の送別會なんかのために忙しい頃のことであつた。

「T(Sの友人)が是非〇〇に行かうと云つて聽かないのでN(Sの友人)のところへ行くと生憎くNはいないでせう。私はくだらないと思ひましたが、Tが思ひ立つたことだからなんて云つて、やれそんな衣服じやみすぼらしいの、やれそんな焼杉じや馬鹿にされるのと色々心配したあげくが、Tの銘仙の衣物と桐の下駄とを探し出してせき立てるので僕もまあそれを身につけたんですね。それから俵を二挺つらねて走つたといふ寸法です。しかし俵の上で考へてゐると何だか馬鹿馬鹿しくつて仕方がない。つまり今迄行かずに濟んだところへ何故今更行かねばならないのだらう。もちろん行つたからつて別に構はないかも知れぬが、あんなところで暇を潰す必要がどこにあらう。と、こんな風に思はれたのですね。だから急に俵を止めて自分の持つてゐた五圓札をTの方へなげるなり、僕は苦しいから失禮すると云つて引き返したのです。俵屋が狐につまゝれた様な顔をしてゐましたよ」

私はSがああの年になるまで——と云つても二十四であつたが——童貞であることを知つてゐたのでこの諧謔半分の告白を決して笑つて聞き流すことは出来なかつたのである。

Sがいよいよ去る日に私達——私と同じ下宿にゐる彼の友、T、N、中華民國の留學生等——は彼を停車

場まで送つた。

彼はすんぐりとした半身を車窓から突き出して、

「みなさん、わざわざ見送りにして下さつてどうもありがたう」

と改まった挨拶をした。いよいよ發車するとき私達は「S君萬歲、……萬歲」と大きな聲で怒鳴つた。汽車が見えなくなつた後で橋を渡り乍ら、中華民國の留學生が云つた。

「今の萬歲は二度きりではありませんか」

そこでみんな吹き出して了つた。すぐ私は考へさせられた。のこりの一度は他日の爲に預つて置くのだとSのことに就てはその後噂で福岡の大學にゐるといふことを聞いたのを除いては、深く知る機會を持たないでゐる。けれど彼の生活がこれまでとはまるつきり似つかぬものと變つて行つたとは思はれない。従つてまた彼が胃散をのむ男でなくなつたとも私には思はれないのである。

——一九二〇、九、三〇——